シビウ発シギショアラ行き列車。

5. シギショアラ

タクシー呼び出し

明くる23日は曇り空だったものの降り出す気配はなかった。そんなことで駅までの1キロちょっとはキャリーカートを引っ張り、徒歩で移動した。この日の目的地は、これもトランシルバニアの古都シギショアラだ。シビウ12時半発、シギショアラ2時49分着の列車で行くことにした。

シギショアラ行き列車の車内。

例のごとく半時間以上前に駅へ着き、シギショアラまで95キロの2等切符を12.4lei(269円)で購入。待合室を兼ねたコンコースで待っていてオバサンに声をかけられた。娘と、幼い孫と一緒にシギショアラに行くところらしい。彼女はシギショアラの高校を卒業したことなどを話、雑談が始まる。しばらくルーマニアの印象など訊かれ、考えがまとまっていない上に英語力不足が重なり、かなり稚拙な返事をする。

列車はかなり早く入線していたが、彼女たちが待合室から動かないので、「こんなものか？」と待ち続けたが、定刻10分前に乗車してみると既に8割程度の席が埋まっていた。見たところ男女半々で学生さん風が多い。発車したときには立っている人も数人いた。

5、6分置きに停車を繰り返し、乗降する人はいるが混み具合は変わらない。沿線風景に見るべきものもあまりなく、おまけに窓際の席に坐れなかったので風景写真は撮影しなかった。1時間ちょっとでコプシャミカに着くと、学生さん風が大挙して下車して行く。

窓際の席が空いたのでそちらへ移動、しかし乗り込んでくる客もかなりいたので再び満席状態に近くなった。シギショアラが近付くと、徐行運転が続く。工事区間がずっと続くから、複線化工事でも行っているのだろう。結局半時間近く遅れてシギショアラに着いた。

シギショアラ市街平面図 0 200m

初めての駅でそれも異国だから、勝手も判らぬまま人波の最後尾近くで駅を出る。宿までは1.5キロほどあり、それも丘の上だから、仕方なくタクシー利用を考えていた。駅舎前にはタクシー乗り場がないので、広場を渡り幹線道路まで行ってみる。TAXIの表示があったので辺りを見回すが、客待ちの車はいない。今到着した列車から降りた人たちを乗せて皆出払ってしまったのだろう。少し離れたところに停車している車はどこか雰囲気が悪く、雲助運転手の類に感じられる。

ピンク色の建物がカーサ・ワグネル。

SC GABIZA SRL
SIGHISOARA
CUI: 17555952
Nr matr: MS 98 YNA
Autorizatie: 100
Apr. Mod. 097/04
Tel: 0265-778242

TAXI

Set tarif: 1 A
Tarif pornire 初乗り運賃 1,59
Tarif/km: 1,59 1キロ当たり運賃
KM: 1,540 走行距離
Val deplasare 走行料金 2,45
Tarif/Ora: 15,90 待ち時間当たり料金
SECUNDE: 24 待ち時間(秒)
Val stationare 待ち料金 0,11

TOTAL PLATA Lei: 合計料金 4,14
TVA:A (00,00%) 0,00

BF: 0022 23/11/12 15:17
COD SOFER: A CURSA 0022
MS0276013712

VA MULTUMIM CA ATI
CALATORIT CU NOI!

タクシー領収書(実寸大)。

折良く今の列車で着いたらしい学生風の女の子が来たので、タクシーは此処で待てば良いか訊いてみた。幸い英語が通じ、間違いないことが判ったが、彼女は1分もしないうちに携帯電話を取りだし通話を始める。話が終わると私に、「すぐにタクシーが来るから。」と云う。「それはあなたのでしょう？」と訊き返したら、「一緒に呼んだので。」とのことだ。ブラショフに続いて若い女性に助けられた。間もなく2台のタクシーがほぼ同時に到着した。ともかくできるだけ丁寧に礼を述べ、車に乗り込む。

後はごく順調で5分後には今宵の宿、カーサ・ワグネルの真ん前に停車した。料金は4.14lei(90円)で、5lei支払い釣りをチップにする。玄関を入るとすぐの正面がフロントで、30位のフロントマンが笑顔で迎えてくれる。

此処の予約もBooking.comで行ったが、シーズンオフでさらに日本人は目立つから、台帳などを開くこともなくチェックイン手続きになる。それでも一応は部屋を下見した。3階の半屋根裏部屋で広場に面している。通常ならば道路からの車輌騒音などを危惧するが、旧市街は一般車両の乗り入れができないから、昼間でも自動車の往来はほとんどない。夜間は先ず問題ないだろう。それに広場を見下ろし、その向こうには時計塔などが展望される願ってもない位置だ。ちなみに三階にある広場向きの部屋は三つで、その中で一番見晴らしが良いのがこの7号室だった。

シギショアラは1999年に世界遺産登録された街だが、この宿も歴史的建造物リストに載る築400年の建物だ。当然のことながらエレベーターはなく、3階まで荷物を担ぎ上げる。部屋で一息ついて時計を見れば、既に3時半を回っていた。

急に空腹が意識される。今から街を歩いて食堂を探すのも大変だし、英ガイドには此処の食堂を大変良いと紹介していた。そんなことでカメラと電子辞書を持ち、1階の食堂を訪ねた。しかし一歩踏み込んだところでガッカリする。タバコ臭いのだ。見回すと窓際に陣取ったオバサン三人がお茶を飲みながら煙草をふかしている。

これから新たに店を探す気力もなく、そしてルーマニアでは店を替えてもタバコと再遭遇する可能性は充分ありそうだ。幸いこの食堂は50席ぐらいの広さなので、離れた席を選んで坐った。

ルーマニア語に、独語、英語併記のお品書きから牛肉フィレステーキのロックフォールソースかけだけにして、ハウスワインがないと云われたのでワインリストからム

カーサ・ワグネルの食堂

ムルファトラールのメルロー。

ルファトラール・ワイナリーのメルロー(赤)を選んだ。ちなみにリストには4ワイナリー、18種が記されていたが値段は13種がどれも35lei(759円)で、その他が違っても小差だった。もちろんワイナリーは知らないものばかりだし、赤の品種に関して理解できたのはカベルネ・ソーヴィニヨンとメルローだけだった。

何とも情けない選択理由だったが、供されたのは飲みやすいワインだった。これを飲みながら待つこと15分、運ばれてきた牛肉フィレステーキは分厚く切られた肉塊は良いとして、見るからに焼きすぎだった。ともかく1枚撮影後、早速ナイフを入れてみる。やはり中心部までしっかり火が通っていた。焼き加減はまだ許せるが、口に含んでみると何か旨味に欠ける。

牛肉フィレステーキのロックフォールソースかけ。

ペーチとブクレシュティで連続的に美味いステーキにありつけたので、それを何となく当たり前だと思っていたのが間違いだったようだ。ともかく二日連続で昼飯は外れだった。しかし食べられないほど不味いわけではないし、付け合わせに温野菜がたっぷりあるのは嬉しい。多少時間が掛かったが完食する。料金はワイン1壜35lei(759円)、ステーキ45lei(976円)。

部屋で一休みして4時半頃から散歩に出かけた。既に黄昏れ始めている。ちなみにこの日の日没時刻は4時41分だ。宿が面しているチェタチイ(Cetății:要塞)広場を横切り、街のシンボルとも云える時計塔に向かった。

14世紀に最初の塔が建設されたが、16世紀に64メートルの高さまで増築され、それが1676年の大火後にバロック形式の屋根で修復された。最上階にあるテラスからの眺望は期待でき、公開時間中だったので塔に出入りする人もいる。しかしこれは明日の楽しみとして、城壁に沿って北へ向かう。

この辺りは石畳で舗装され、間に花壇のある小規模な公園風だ。往時は城壁が聳えていたのだろうが、今は30センチほどが石積みで、その上は鉄柵の手摺りになっている。展望台を思わせる此処から眺めると、眼下にティルナヴァ川が流れ、その向こうに三位一体正教会や新市街が見える。市庁舎裏手北端で行き止まり、踵を返した。

三位一体正教会。

左側に鋳掛屋ギルドの塔。右にドミニコ会教会。

チェタチイ広場で会った犬。

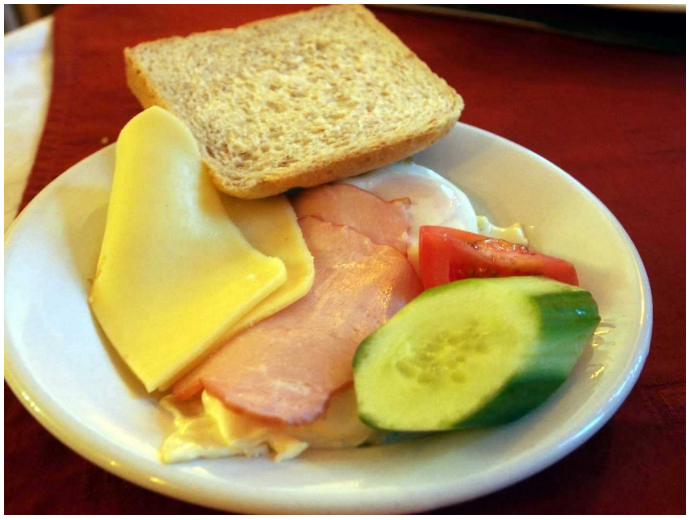
5時20分のチェタチイ広場と時計塔。

チェタチイ広場に戻り、そこにいた犬としばらく遊ぶ。首輪はしていないが毛並みは良いから、付近の住民から餌を貰っている半野良犬なのだろう。気性も素直で変に纏わり付くこともなくおっとりしている。

犬が飽きたのか立ち去ったので、部屋に戻る。しばらくして落ち着くと、晩酌を開始した。飲みながら室内を見回して行くと、色々欠陥が目に付く。入り口のダウンライトが点かないし、天井灯りは三分の一球切れで、ベッドサイドのスタンドは二つあるうちの一つが故障している。スチーム暖房は一つだけ運転ができもう一つは暖房能力がない。しかし既に衣服を脱ぎ捨てて寛ぎつつ飲み酔いも回り始めているので、宿に修理を要求するのは翌日のことにした。

時計塔と山の上教会

11月24日はどんよりと曇った朝だった。8時10分に朝食を摂りに下へ降りる。昨日食事したところで朝食も供されるとのことだったので、坐って待つが何も出てこない。しばらくしてフロントまで行き、判ったのは食堂の手前にある小部屋にパンやハムその他の皿がならび、ビュッフェ方式での朝食だった。しかし虚しく待っている間、ウェイトレスは何回か前を通り過ぎている。一言声を掛けてくれても良さそうだ。この宿に対する評価がまた下がった。



朝食。

部屋に戻り、若干温度が低いように感じて測ると朝7時に18℃だった。スチーム暖房の能力もさることながら,壁の保温性はどうなのかと調べてみると、内壁は漆喰ではなく石膏ボードのペンキ仕上げだ。歴史的建造物リストに載る築400年の建物だと喜んでいたのに何となく裏切られたような気分になる。

10時に出かける。朝食から戻るとき、洗濯物を頼めることをフロントで確認してあったので、レジ袋に入れたカッターシャツとついでに下着類も二組み入れた。街歩きの支度を終え、レジ袋と故障している卓上スタンドを持ってフロントへ行く。夕方までにはどちらも片付くとのことだった。

時計塔。屋根のすぐ下が展望廊下。

歴史博物館の展示品。上：鋳掛屋ギルドのエンブレムと大鎌や馬鍬などの農機具。
下：彫刻彩色された長持ち。

まず時計塔を訪問。なんと云っても街のシンボルみたいな所だし、上から街全体を俯瞰して感じを掴んでおけば周遊するのに役立つだろう。宿から塔まで僅か130メートル。塔の左側に付属する建物の武骨な木製ドアを開けると、そこで入場券が買える。入場料は10lei(217円)で、一応歴史博物館と云うことになっている屋内を撮影するならば別途30lei(651円)だった。撮るに値するものなどないと思ったが、この街の歴史遺産に対する寄付として支払うことにした。

展望廊が目的ではあるが、そこへ向かうために階段を登って行くと、各階が歴史博物館の展示室になっている。一応覗いてみたが、左画像のような展示物は何かその分野に深く興味を持つ者ならばともかく、一般人が見てもしょうがないと思う。しかしなぜか日ガイドには、「六層の博物館が素晴らしい。」と記されていた。

ちょっと異質に感じたのがロケットの模型などが置かれた層だ。これは初期のロケット研究者で、第二次大戦時に(フォン・ブラウンなどと共に)V2ロケットの開発したヘルマン・オーベルトの生家がこの街にあるためらしい。街としては彼を誇りにし、生家の前はヘルマン・オーベルト広場と命名されている。

途中から展示室は素通りする。ようやく辿り着展望廊は期待を裏切らない。靄が掛かってせっかくの景観が多少ぼやけているのが残念だが、中世の雰囲気を色濃く残す街をじっくり俯瞰することができた。

時計塔展望廊下から南方向の眺望。

時計塔展望廊下から南西方向の眺望。丘の中腹左側に鋳掛屋ギルドの塔、頂上左が山上学校、右が山上教会

トランシルバニアの代表的中世都市としてシギショアラ、ブラショフ、シビウを較べてみると、シギショアラは14世紀に王たちの定住地となり都市特権を授けられた。それから数世紀のあいだ、街は中央ヨーロッパ東端の軍事的要衝であり商業の中心地となった。しかし17世紀から18世紀にかけ軍事侵攻や大火、ペストの大流行などの災厄に見舞われ、繁栄から取り残されて行く。

時計塔展望廊下の手摺りには各国大都市の方角と方向を示すプレートが取り付けられている。東京もあった。

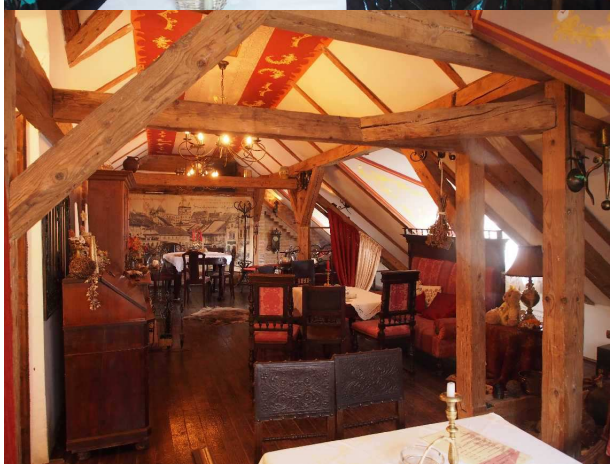
現在の人口はシギショアラ3万、ブラショフ28万、シビウ15万と他の2都市に大きく水をあけられている。地形的にも丘の上に立地し城壁の外側はどこも斜面なので、市街地として周辺に拡大することができない。しかしそれ故になおさら中世の雰囲気は旧市街全体を濃厚に覆っている。

時計塔で20分ほど過ごしてから、裏通り巡りを開始した。塔の足許にあるその名も博物館広場から、鋳掛屋通りを南へ行く。100メートルほどで小さな広場があり、左前方には城壁の防御設備で、往時のギルドから提供された資金により建設されたため、その名を冠し鋳掛屋塔と呼ばれている櫓があった。

門がありその先は私有地かもしれないが、大きく扉が左右に開かれていたので踏み込んでみる。しかし鋳掛屋塔は少なくとも今のところ非公開のようだったし、山の上教会は間近にあるのに、そこへ通じていそうな径も見当たらなかった。仕方なく櫓を撮影し引き返す。

先ほどの小広場に面して、カサ・バロッカとカサ・コシトラルルイ（Cositorarilor：鋳掛屋）がある。後者は櫓に因んだ命名らしいが、ともかく此処が併設するカフェが営業中で雰囲気も良さそうなので入ってみた。玄関からすぐのカウンター内側に20代の女性が二人並んで立っていた。揃って美人だ。どうやらルーマニアは美女（美男）の多い国らしい。

鋳掛屋塔。

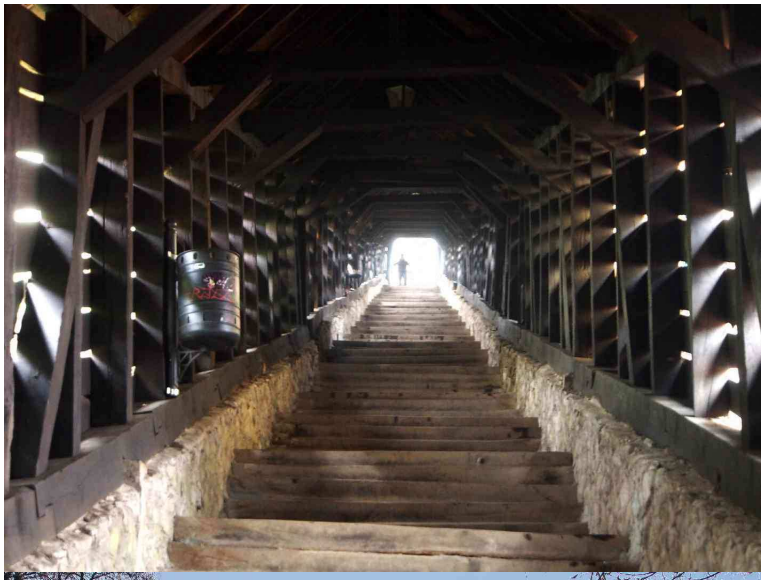


カサ・コシトラルルイ。上：1階。下：2階。

室内には鋳鉄製、四人掛けの椅子テーブルセットが3組と、応接テーブルソファー、スツールなどがあり、いささか過剰な嫌いもあるけれど、女性的で趣味の良い室内装飾が施されていた。寒いところを1時間ほど彷徨ってきたので、20℃くらいに暖房された室内は心地良く、コートを脱いで寒さに強ばった体を徐々にほぐした。

バックグラウンドミュージックにジャズスタンダードが流れている。なぜかこれまで入った飲食店では、アメリカンポップスなどばかり聴かされ辟易していたので、新鮮に聞こえた。ウェイトレスが注文を取りに来たので、カプチーノを頼む。テーブルの上にルーマニア語のお品書きカードが置かれていたので、内容を訊いたところ、朝食に関するものだった。昼食はやっていないそうだ。

店内に他の客はいないものと思っていたが、しばらくすると2階から若者四人のグループが降りてきた。彼等が去った後、ウェイトレスに一言断って上階の様子を見に行った。下と共通するトーンだけれど、隠れ家的な雰囲気がより濃厚になる。こんな所でジャズを聴きながら、読書やあるいはまた何もせずに呆然と数時間過ごすのも良さそうに思えた。飼い猫らしいのが一匹、物陰から出てきてこちらの様子を窺っていたが、すぐに退屈したらしく去って行く。

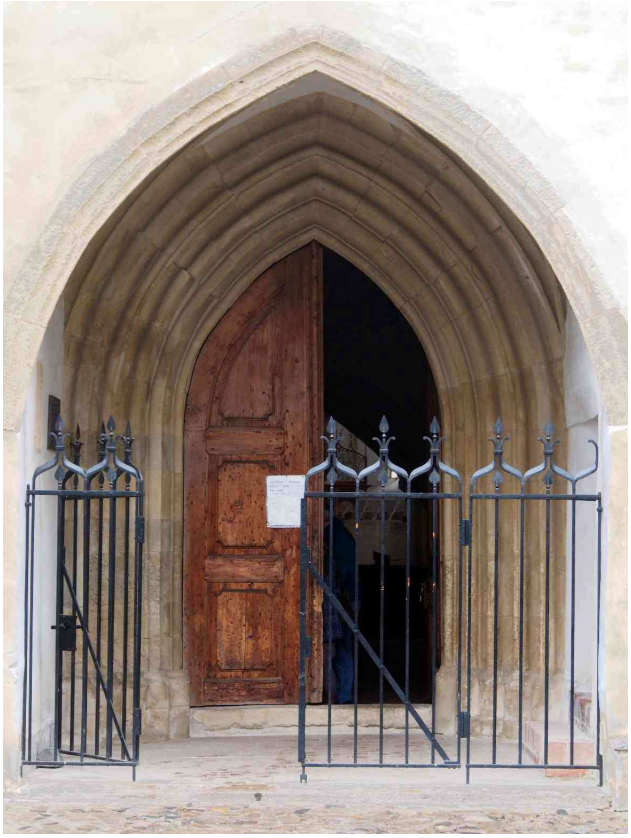


上：屋根付きの木造階段。下：ドイツ語学校。

階下に戻りカプチーノをゆっくり楽しむ。10分強の休憩だったが、降りみ降らずみ状態が続く街を、再び歩き始める活力が戻ったような気がする。カプチーノの料金は10lei(217円)だった。

カサ・コシトラルルイが面する鋳掛屋通りを西へ行くと30メートルほどで屋根付きの木造階段がある。現在は175段だが1642年に設置された際には300段だったらしい。丘の上にある教会や学校へ往来する人々を風雪から守るためなので、屋根のみならず壁もある。類例はほとんどないようだから希少価値は高いかもしれないが、見ても別段面白いものではない。

ともかくこれを登って丘の上にでた。右側から上ってきた石畳の車道は、左へ続き突き当たりに学校がある。現在はドイツ語を教えている学校と



山の上教会玄関。

のことだが、創建は16世紀に遡りトランシルバニアでは最古の学校だとの記述もある。現在の建物は20世紀初頭に築かれたものらしいが、この辺りの情報はルーマニア語のインターネット情報をグーグル翻訳したものなのでかなり危うい。

ドイツ語学校の前で石畳の道はV字型に右へ折れ曲がり、すぐの所に山の上教会がある。しかし玄関は反対側にあり、教会に沿って回り込まなければならない。

教会の正式名称は聖ニコラウスで1525年に建設されたゴシック様式の建物だ。当初はカトリックだったが1547年にルーテル派に替わった。トランシルバニアを代表するゴシック建築との評価もあるが、外観的にはロマネスクに近いような気がする。様式はともかく眺めてもさっぱり面白くない上に、樹木などが障害となっているので全体像の撮影は諦め、玄関廻りだけを1枚撮った。

山の上教会外観。インターネットより採取。

玄関内側に30代中頃かと思われる男女がいて、切符2lei(43円)を売りながら、簡単なガイドもしていた。男性の方は愛想が良い上にカタコトの日本語も話す。

内部も見所に欠けていた。当初から外観同様の装飾性に乏しいものだったかと思われるし、間もなくプロテスタントに宗旨替えしてしまい、壁画には価値あるものがあったけれどもこれも損壊の結果、現在見ることができるのは断片をつなぎ合わせたものだ。かててくわえて撮影禁止のため、天井の網状ヴォールトなどに興味を惹かれても記憶にとどめるしかなかった。そんなことで5分弱の滞在で教会を辞去する。

屋根付き階段や教会は期待外れだったが、丘の上まで来たことは無駄足とならなかった。教会の裏側にあるザクセン墓地はゲートの鉄格子を介して垣間見るだけだったが風情のある佇まいだったし、ドイツ語学校の前の崖際から見下ろす旧市街も、おそらく数百年前とあまり変わらぬ姿で小雨に煙っていた。

丘の上から見下ろす旧市街。

上：丘からの下りで見かけた廃馬車。右側のは乗用車らしい。ルーマニアで荷馬車は珍しくないが乗用馬車はさすがに見かけない。下：中世の仮装で太鼓を叩きながら街を練り歩く一団。

丘を下るときは屋根付き階段下り口を通過し、石畳の坂道を行く。通りの名前はグーグルマップによれば階段道路だ。それではと屋根付き階段の通りとしての名称を調べると、「学校階段」だった。今ひとつ信頼性に欠ける情報だ。

階段を通るのに較べ、この通りは若干距離的に長いものの、歩きやすさという点では遙かに勝るし、風雪に対する障壁がないから景観の点でも良い。煉瓦色の瓦屋根や、城壁の櫓を見下ろしながら下った。2分ほどで右手から屋根付き階段が接近してくる辺りで、チェタチイ広場の方から太鼓の音と、口上を唱えているのが聞こえてきた。

興味をそそられもしなかったが、そのまま進むと成り行きで彼等と遭遇した。時代考証などしているかは疑問だが、中世を感じさせる衣裳を纏った男三人女一人の一団だ。何となく対面状態になると歩みを止め、「ヨウコソシギショアラヘ！ワタシハタイコタタキデス。ヨロシクオネガイシマス。タイコカラ、ミナサマヘ…」と流暢ではないとしてもはっきりした日本語で口上を述べ、続いてチョウチョを日本語で歌い出した。

一団の正体は不明だが、出会った日本人旅行者は多く、インターネットで探すと数多くの経験談が見付かる。もちろん日本人以外はもっと多く、他言語で検索すれば見付かるのだろう。孫引きになるが、「NHKの『世界ふれあい街歩き』という番組でシギショアラを紹介していた。赤い帽子をかぶった男性がインタビューに応えていて、本業は美術の先生で、1年半で55カ国の歌を覚えたとのこと。情熱があるから、できたそうだ。」との記述も見付かった。2007年の放送らしいので、同じ人ならば現在のレパートリーはさらに増えていそうだ。

一応礼儀として曲が終わるまで彼等に相対した位置にとどまる。しかし彼等の行動が何を目的としているか良く判らないので対応も難しい。大道芸人の類ではなさそうだから、金を払ったりする必要はなさそうだ。結局、「旅行者を楽しませることにより、シギショアラの観光開発を促進させようとしているボランティア」とみなし、礼を述べると共に数枚撮影した。

彼等と別れて西へ向かうと城壁にぶつかり、門があった。車が通過できる大きさだが、車止めが設置されている。門の左右にかつてのギルドが建設した櫓があり、左が精肉業者の塔、右が毛皮職人の塔だった。。

精肉業者の塔（左）と毛皮職人の塔（右）。

靴職人の塔。

城壁に沿って北へ向かう。最初に出会うのが仕立屋の塔だ。潤沢な資金を持ったギルドだったので、かつては時計塔に匹敵する規模だったらしい。1676年の大火で損壊し、現在のものは1935年に再建された（多分鉄筋コンクリート製の）風情に乏しいものだ。アーチ型の門が並んで二つあり、旧市街に車輌が出入できるのは此処だけだ。しかしそれも門外へちょっと行ったところにガードボックスがあり、出入りを管理している。

さらに北上を続けると、靴職人の塔がある。この塔も同じ大火で損壊したらしいが、1681年に再建されたようなことを記したプレートが外壁に取り付けてあった。管理状態は良く、二階へ通じる外階段は使用できる状態になっている。公開時にはこれを登って二階から屋内へ入るらしい。しかしシーズンオフのせいか、扉は閉ざされていた。

この辺りが旧市街の北端で、進路を東へ変えざるをえない。すぐの所にカトリック教会があったけれど、1983年に再建されたもので、素っ気ない外観はさっぱり面白くない。扉が開いていたので内部も見るが、さらに素っ気ないもので、ただちに踵を返した。

教会の面している城壁通り（Strada Zidul Cetății）は短く、すぐ進行方向は南へ変わる。間もなくこれまで見てきた建物より一廻り大きくて、雰囲気も異なる建築物が見えた。1888年に建てられた市庁舎だ。様式的には一応バロックなのだろうか、割にシンプルな作りだった。しかし中世ドイツの典型的な建築様式が、一説では九割とも云われるこの街で、違和感のある建物だった。

市庁舎。

もう一つ不思議に思うのが市庁舎の豪華さだ。此処のみならずハンガリーのジュールやペーチ、ルーマニアならばブラショフ、シビウも同じようなことを感じる。これを説明するものが見付からず愚説を披露するならば、「市庁舎は市役所が入っている建物ではない。」はどうだろうか。要するに事務所ではなく、その地方を支配する貴族や大地主が集まって政治的や社交的な活動をする場としての宮殿だったと考える。さっぱり自信はないが、こんなことは何を調べれば判るのだろう。

閑話休題。狭いシギショアラの旧市街をほぼ一周したことになる。それでもさらに周辺をしばらく散策してから、一旦宿へ戻り一休みしてトイレなど使う。

煉瓦積みの建物に設けられた中庭へのアーチ通廊に木製の武骨なドアが取り付けられている。刻まれた窪みは犬のためなのか？近付くと顔を出したのはこの家の飼い犬らしいがあまり友好的ではなかった。較べればハンガリーの方が友好的な犬が多かった。

上：一応石窯で焼いていた。下：ピザ・ディアボラ。

1時近くなって昼食のために出かける。宿の食堂は昨日で懲りたし、午前中に街を巡りながら見た感じでは、飲食店は少なからずあるものの、どこも観光客相手であることがあからさまな感じだ。そんなことで新市街の地元民が行くような店を探すことにした。一応英ガイドから2店候補をマーク。

チェタチイ広場から時計塔をくぐり、石畳の坂道を下ってヘルマン・オーベルト広場へでる。広場を囲むようにしてカフェや食堂が数軒ある。土曜日の昼下がりゆえかカフェのテラス席などはぐずついた天気にもかかわらず混み合っていた。

最初にピザ屋を偵察する。英ガイド推薦の Jo Pizzerie だ。ガラスドア越しに見ると、比較的空いているし、突き当たりの壁際にあるのはピザ焼き用石窯らしい。ガイドブックで店を漁ったときからピザを食べたい気分があったので、迷わずこの店にした。

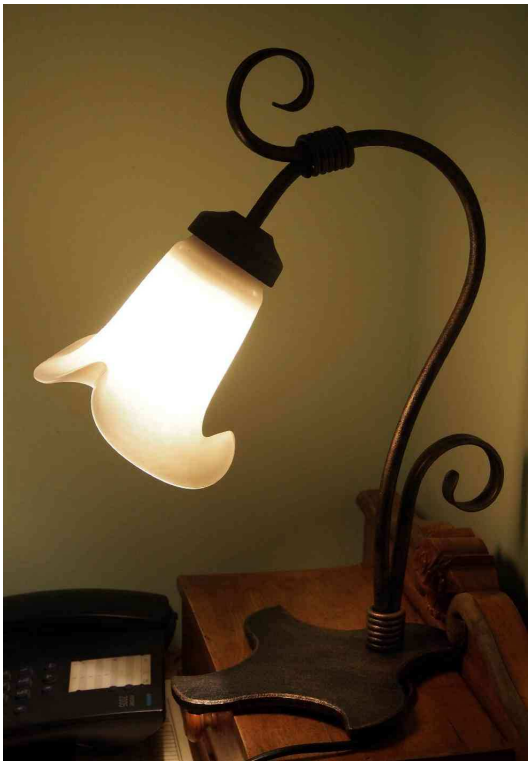
店内には2階へ通じる階段もあり、登り口のサインを見ると2階が喫煙席らしい。1階中ほどの席を選び、テーブルに置かれた画像入りラミネートメニューには価格と重量が手書きされている。風情のないお品書きではあるが、量を変えたり価格改定に簡単に対応できる。ともかくこれを見てピザ・ディアボラ440㌘とグラスの赤ワイン注文した。

ワインはすぐに到着。グラスに目盛りが入っていて250cc注がれていた。10分ほどでピザも登場。実のところディアボラがなんなのか知らず、お品書きの材料を見て選択したのだが、マルゲリータに生ハムとトウガラシが加わったものと云えば良さそうだ。ワイン、ピザのどちらも無難なもので、空腹感は強かったので気持ち良く飲み食いする。

ところがウェイトレスのネエチャンの友達らしいのが数人入ってくると、一緒になって隅のテーブルでコーラなど飲みながら煙草をふかす。余程文句を云おうかと思ったが、前日と異なり、煙が流れてくることもないので我慢。しかし心中が波立った分だけピザが不味くなった。

半時間ちょっとでピザの昼食を終える。勘定はディアボラ14.5lei(314円)、ワイン2杯10lei(217円)だった。続いて明日の日曜日に商店が休むことを危惧して買い物をする。チーズ100㌘3.09lei(67円)、トマト206㌘1.23lei(27円)、ミルク1㍑5.49lei(119円)、ヨーグルト400㌘3.99lei(87円)、ポテトチップ30㌘1.2lei(26円)、ロールパン100㌘1.8lei(39円)、ウォッカ0.7㍑59.99lei(1,301円)、ミネラルウォーター(炭酸)1.5㍑2.99lei(65円)など。後は時計塔への坂道を漫ろ歩いて宿へ。

ヘルマン・オーベルト広場近くに在った民家。立派だがルーマニア風とも違うような気もする。しかしこれまでザクセン系を多く見て、純ルーマニア風はあまり見ていない。



故障したのと同型スタンド。

宿へ帰ると、フロントにいたのは昨日のチェックイン時、そして今朝の洗濯依頼時と同じ青年だった。洗濯物のレジ袋を取り出すと、中からソックスをつまみ上げ、「これは片方しかなかった。」と云う。料金は11lei(239円)だったので現金で支払うと、これを受け取りながら、「この片割れが見付かったら、無料で洗濯しますよ。」と付け加える。修理が済んだという卓上スタンドも手渡してくれた。

この手の失敗は年を追うごとに多くなっているから、「またやってしまったか。」と思っていたが、部屋に戻って記憶を辿ると辻褄が合わない。朝方レジ袋に詰め込むとき、いかに洗濯物といえども、丸めたままは失礼だから、ソックスは伸ばしてから一足を重ね、二つ折りに畳んで他の洗濯物に乗せたから片方だけはありえない。多分乾燥機か何かの片隅に引っかかっているのだろう。しかし元々安価なものだし、旅もそろそろ終わりに近付いたので、無くなったならそれで良しとした。

一眠りして目を覚ますと辺りは既に薄暗くなっている。直して貰ったスタンドを点灯したが、20分ぐらいすると消えてしてしまう。しばらくしてから、浴室のコンセントでも点かないことを確認後、フロントへ行くと、なぜかフロントでは点灯する。相変わらず同じだったフロントマンは、念のため違うスタンドを持ってきた上に部屋まで様子を見に来てくれた。今度は上手い具合に彼の目の前で問題が発生する。スタンドが明滅を繰り返すのだ。

「これは電源に異常があるのだろう。」ということになったので、ついでだから依然として消灯したままの入り口ダウンライトなども含めて、電気技術者による全面的なチェックを明日行うことにした。「日曜日なのにできるのだろうか？」と思いつつも、不具合がはっきりしただけでも良かった。

シギショアラの二日目

11月25日は雨の気配はなかったもののどんよりと曇っている。いつものように朝食は早々済ませたが、その後も部屋でぐずぐず過ごした。9時頃にドアをノックされ開けてみるとオバサンメイドがしょんぼりした格好で立っている。何事かと訊いたらルーマニア語で口ごもりながら、靴下の片方を差し出した。おそらく乾燥機などの中に残っていたのに気付き、フロントへ届けたら、「自分で持っていって謝ってこい。」みたいなことを云われたのだろう。ともかくできるだけ愛想良く受け取り礼を云う。

部屋でのぐずぐずが続いたのは、出かけても行く当てがないからだ。それならばなぜ此処に三泊もしたかなのだが、一つは日曜日に移動しないことがここ数年の旅スタイルになっていて、今回もパンノンハルマ、ペーチ、シナイアといずれも同じ宿で過ごした。もう一つの理由は訪ねたい街などの目的地が見

トゥルナヴァ・マレ河畔で見かけた野犬。精悍な顔つきだ。

付からなかったことだ。マラムレシュ地方などに魅力は感じたものの、行くとすれば一週間ぐらいは日数を掛けたかった一方で、11月30日の帰国が動かせない以上は無理だった。

チェタチイ広場から時計塔をくぐり、城壁の下部に沿った遊歩道を歩く。適当に道を選んで坂を下ると、トゥルナヴァ・マレ川の畔に出た。向こう岸には三位一体正教会がすっきりとした美しい姿で聳えている。

トゥルナヴァ・マレ川には教会よりちょっと下流に歩道橋が架けられている。上流には車道も兼ねた橋があるけれど、この歩道橋を渡れば500メートル弱近道になる。旧市街にはカトリックやプロテスタントの教会はあるのに、正教会はないので今や圧倒的多数になった正教徒もこちらまで詣でなければならないのだろう。

歩道橋を渡り正教会の前まで行く。しかし10時半なのに扉は閉ざされていた。1937年に竣工したモダンな外観を持つこの聖堂がどのような内部を見せてくれるかの興味はあったものの、解消されないまま踵を返す。

三位一体正教会。

右岸を川沿いに下流へ向かうと400メートルほどで橋があり、これは一昨日にタクシーで渡ったものだ。右折して駅前まで行く。タクシー乗り場には5台ほどが停車していた。もちろん中には雲助もいるだろうから、あの時に携帯電話で呼んで貰ったのは大袈裟に云えば天佑だった。

駅前にはピザ屋と数軒の商店があるだけで寂れた感じだ。シギショアラの新市街中心はヘルマン・オーベルト広場界隈らしいが、それとてもシビウやブラショフと較べれば寂しい限りだ。中世は栄えたものの、近世の早い時点で時流から取り残されたらしい。

しかしそのことが既に述べたように丘の上の限られた平地という条件と相俟って、中世城塞都市の残存率90％（どうやって計算するんだろう？）の驚異的数字になっている。そして数字はさておいても、街路を彷徨ってみれば、「ルーマニアの宝石」を実感できるのだ。

城塞都市を見上げながら歩き、こんなことを考えていた。先ほどの橋まで戻り、渡ってすぐを左折する。そのまま真っ直ぐ行くと靴職人の塔の下辺りになる丘の麓にぶつかる。此処まではタクシーで辿った道だが、ここから先は遊歩道が斜面に刻まれていた。樹林の間を上る径は良く整備され歩きやすい。間もなく塔のすぐそばにでた。

駅からの道すがら城塞都市を見上げる。左の塔がカトリック教会、中央近くに靴職人の塔、右側にドイツ語学校と山の上教会。

バーグ・ホステル。

カトリック教会の前からチェタチイ広場向かうと左手に「旅籠」と云った感じの宿がある。バーグ・ホステルでアーチ型の門から見える中庭の薪や道路に面した窓の佇まいが郷愁を感じさせる。バックパッカーを主たる対象とした宿らしいけれど、個室（バス・トイレ共用）の一人一泊が76lei(1,648円)と随分安い。家族経営でやっているようで、シーズンオフの空いている時期ならばたまにはこんな所も面白いかもしれないと思うが、既に手遅れだ。

ホステルから20メートルほどでカーサ・ワグネルの玄関だが、そのまま通り過ぎて屋根付き階段登り口の方へ行ってみる。日曜日のせいか観光客が多く、土産物屋などにも活気が出ていたが、土産物はもちろん食堂でも入ってみたいような店が見付からないまま、途中から引き返す。

太鼓と歌のパフォーマンス・グループ。昨日の女性に替わり、銅鑼を持った青年が参加している。

チェタチイ広場にも人が多いので、逆に旧市街で食事場所を探す気持ちがなくなった。ヘルマン・オーベルト広場界隈で探すべく、時計塔の方へ行くと、太鼓と歌のパフォーマンス・グループに再会した。基本的にボランティアと思われるが、例えば衣裳にかかる費用などはどうなっているのか。本業が別にあるとすれば、土曜、日曜だけの活動なのか、それとも他に多くのメンバーがいて、適当に交替しているのだろうか。

彼等を見送ってから時計塔をくぐって坂道を下る。広場に近付くにつれ、1918年12月1日大通（建国記念日を冠した通り）を渡り、その先の上り斜面からの旧市街がどのように見えるか確かめたくなった。

大通を渡り200メートル弱南東へ進むと、大通と平行したようなジョージ・コシュブーク通りがあった。これを歩いてみるが、家並みに遮られ中々撮影ポイントが見付からない。それでも我慢して400メートルほど行くと左手に空き地があり、何とか撮影することができた。しかし曇り空のためぱっとしない画像となってしまった。

オーベルト広場へ戻り、広場の東にあるピッツェリアを品定めする。角の二箇所と中央に塔があり、築百年を超えているであろう3階建て（中央の塔は6階くらい）の建物は風格充分だ。しかし外からうかがう食堂部分はそれほどでもなかったし、昨日もピザだったので此処はやめにする。

ジョージ・コシュブーク通りから見る時計塔、ドミニコ会修道院付属教会、鋳掛屋ギルドの塔、市庁舎など。

1テーブルだけガラスで囲われた禁煙席。

上：豚のチョルバ。下：鶏胸肉のシュニッツェル。

60メートルほどトゥルナヴァ・マレ川の方へ行くと食堂ルスティックがある。英ガイドも推奨する店だ。道路に面して床から天井近くまでスモークガラスが入った窓なので、中の様子が大体わかる。40席以上ありそうな店内に先客は一組とみた。これもガラス張りのドアを押し開けて入り、ウェイトレスにどの席でも良いことを確認して先客からは離れたテーブルを選ぶ。無駄な抵抗かもしれないが、少しでもタバコに悩まされる可能性を減らすためだ。

英語併記お品書きから、豚のチョルバ、メインに鶏胸肉のシュニッツェル、付け合わせに各種野菜180㌘を選んだ。酒はハウスワインの赤をグラスで頼む。

チョルバもシュニッツェルもかなり待たされたが、食べたものに関する記憶は残っていない。きっと可も無く不可もなしだったのだろう。最後をカプチーノにして、勘定はチョルバ9.8lei(213円)、各種野菜8lei(174円)、シュニッツェル9.8lei(213円)、カプチーノ4lei(87円)など明示的に注文したもの以外に、ペッパー1lei(22円)、スライスパン3切れ1.5lei(33円)、サワークリーム1.5lei(33円)などもレシートには記載されたいた。

ルーマニアでは荷馬車が現役だ。

しばらく周辺を散歩し、宿へ帰り着くと2時を少し回っていた。そのまま半時間ほど午睡。眠りから覚めても、部屋でメールチェックやインターネットでの情報収集に時を過ごし、4時半を回って外出した。これと云って当てもなかったので、もう一度シギショアラ駅へ行き明日の切符を買うことにした。

駅のコンコース兼待合室はほぼ真四角で、その三隅に出札窓口があった。最初に行った窓口ではクレジットカードの処理ができず、云われた窓口に移動する。インターネットのルーマニア国鉄情報から、シギショアラ9時9分発、シナイア着12時28分の、乗り継ぎが12時58分でヤシ着20時29分のつもりでいた。ところがこの切符を売ってくれない。駅員が見ているPCのモニターは外からも覗くことができ、便は表示されているのにもかかわらずだ。

窓口の女性は英語をほとんど話さず、繰り返しLateという言葉が出てくる。諦めてインフォメーションを兼ねた三つ目の窓口に行き、ようやく事情が判った。シギショアラへ来る線路が工事中のため徐行運転を行い、当該列車の到着が40分ほど遅れるので、シナイアでは乗り継ぎできないというわけだ。確かに思い返せば二日前にシビウから来たとき、到着がそのぐらい遅れたのだった。

しかし工事は最近始まったわけではなく、作業現場の様子からすると、少なくとも1年以上は

駅からの帰り道、穏やかな夕景が美しかった。

継続している。日本であれば当然時刻表を改訂するが、ルーマニア国鉄はそんなことをしないらしい。ともかく1本早い7時14分発を利用することにして、その切符を買った。

1枚の切符に印字され、シギショアラ7時14分発、ブラショフ10時7分着、128キロの2等が15.5lei(336円)、次ぎにブラショフ12時発、ヤシ午後8時29分着、457キロの2等が77.5lei(1,681円)。これに乗り継ぎ(?)割引9.9leiが適用され最終的に93lei(2,017円)が料金だった。ちなみにブラショフからは長時間の乗車になることもあり、料金的にあまり差のない1等車にしたかったが、編成に含まれていなかった。

駅舎を出ながら考えたのは、幸運にも散歩ついでに切符を買うことを思いついたことだ。そうでなければヤシに着くのが深夜になってしまうところだった。

穏やかに暮れてゆく黄昏時を楽しみながら帰り、遊歩道を登って靴職人ギルドの塔の横から宿へ帰る。フロントには70位の上品なじいさまが坐っている。どうやらこの宿のオーナーらしい。明日の出発が早くなったので、支払いを済ませておくことにした。3泊の料金が533.94lei(11,580円)で、これをカードで支払う。ついでに明日の朝食がいらないことを告げ、7時14分の列車に乗りたいので、それに間に合うようにタクシーの手配も頼む。朝飯替わりにサンドイッチを用意しようかとの申し出があり、細かい気遣いは有り難かった。しかしそこまで必要はないと、感謝しつつ断る。

部屋に戻って明かりを点けると、すべて正常だった。電気技術者による全面的なチェックが約束通り実行されたらしい。晩酌を初めてしばらくすると広場からの人声が聞こえた。大声を発しているわけではないが、興味を惹かれて窓辺へ立つ。暗いのではっきりしないが、二十歳ぐらいの若者三人が松明を振り回してパフォーマンスを実行していた。音楽や観衆がいなかったことを考えると、練習だったのかもしれない。窓辺を離れてしばらくすると、広場の方も静まりかえった。

7時にチェタチイ広場で行われた炎のパフォーマンス。